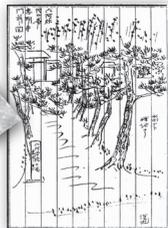
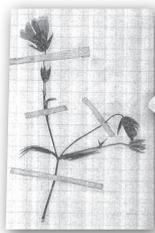


庭の荷風の庭



したたかな“理系感覚”を持つ作家・荷風の
文芸世界を訪ねる

訪問者 坂崎 重盛

兄弟子の草履揃える野心かな ㊦

詩人にして評論家、また短詩型表現の異端傑物、イクヤーク・加藤郁乎（一九二九～二〇二二）が、ついに絶筆に至る、偉大な小著文庫本『俳人荷風』と『荷風俳句集』を手にし、『俳人荷風』の中、日夏耿之介——「荷風を偏愛した詩人俳諧師」——が、きっかけとなつて、日夏のイナセな、荷風俳句（というよりやはり俳諧か）理解と、この異貌詩人の偏奇空間を垣間見て、少しく時を過ごしてしまった。

荷風に戻ろう。荷風の俳諧世界に戻ろう。散人の五七五世界をたずねることにしよう。くりかえしになるが、荷風俳句の網羅一冊となれば、やはり加藤郁乎『俳人荷風』しかない。

江戸俳諧を再評価したイクヤ大人

荷風の俳句は、月並み、作家の手すさびの句として、これまで専門俳人に無視、軽視されてきたわけだが、その江戸以来の、月並みと滑稽句の研究第一人者が、誰であろう、この加藤郁乎であった。

セコ本棚から、郁乎、江戸俳諧三部作をおもむるに

引き出す。『おもむろ』と言ったのは、気持ち的には『ヨイシヨ』と心の中で自分を声をかけないといけないくらいの大著、重さだから。その三部作とは――。

・『近世滑稽俳句大全』（一九九三年、読売新聞社刊／画入／六九八頁）

・『江戸俳諧歳時記』（一九八三年、平凡社刊／画入／六九八頁）

・『俳諧志』（一九八一年、潮出版社刊／画入／六三三頁）の三冊。これを棚から下ろし、いっしょに胸にかかえて机の近くまで運ぶ、このドッシリとした重力感の嬉しさ、めでたさ！ さくて、（久しぶりに三冊をあこれ、チラ読みしてみるか）というおだやかな胸のときめき（これでまた、原稿は進まず、春の一夜を過ごししまっな）。これでいいのだ。

三冊、なんの考えもなしに順不同で列記してしまつたが、すぐにこの誤りに気づかされた。世の中、郁乎大人に対する受容の時間の経過、というものがあるだろう。どの本が先に刊行されたか、というのは、とくに著者にとっても読者にとっても、当然、そう軽々しいことではなかった。

というわけで、まず刊行順に『俳諧志』から。装丁

は田村義也。この人ならではの、強い押し出しの文字組みながら、下品にならず格調がある。表紙はざっくりした布製。これだけで嬉しくなる。内容は――。三冊とも、ごくごくざつと流したので、よろしくというわけで、「小序」と目次から。まず「小序」の書き出しは

四季の別いちじるしく、それぞれの風趣景物に恵まれてきた日本人はいまになお、月を見、花を思うのころを失い忘れていない。そして、花鳥風月を愛する風流心の絶えぬ一方、滑稽また諧謔をこのむいわば俳おどげごろの折ふし働いてあるのも周知のことであろう。

と、俳おどげごろ、という、今日、耳なれぬ言葉を用いて――「面白きことある時興に乗じて言い出し、人をも喜ばしめ我も楽しむ」（松永貞徳『御傘』の序より）――俳諧における滑稽の重要性を、この巻の冒頭で語りはじめ。

江戸俳諧の、まさしく正しき再評価であり、これが近・現代俳人には不真面目な態度であり、陳腐、月並みな句としてしりぞけられてきた。

ふまじめさはともかく、江戸の遊びごころを尊ぶ、